

学位審査報告書

新制

人

114

(ふりがな)	やまもと たつや
氏 名	山本 達也
学 位 (専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人博 第 464 号
学 位 授 与 の 日 付	平成21年3月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻
(学位論文題目)	
伝統／現代を生きるディアスポラ ——北インド・ドラムサラのチベット難民 舞踏集団TIPAを事例に	
論 文 調 査 委 員	主査 教授 田中 雅一 副査 教授 山田 孝子 副査 教授 田辺 明生 副査 教授 橋本 和也

人間・環境学研究科

(論文内容の要旨)

本学位申請論文は、北インド・ダラムサラ在住チベット難民舞踊集団 Tibetan Institute of Performing Arts (以下 TIPA) を事例として、伝統的なチベット文化と現代的なチベット文化の上演に携わる人びとの実践を主題とする文化人類学的研究である。本論文の目的は、かれらがチベットの政治的主張を公演を通じてどのように構築しているのかを明らかにすると同時に、みずから演者としてそこに生きる人びとを描き出すことである。とくにかれらの活動に自ら関わりながらもディアスポラの生を送る演者たちの困難を描き出すことを最大の目的としている。

本論文は二部構成、全 11 章からなる。序章では、本論文を書くに至った動機、先行研究のレビューを通じ、本論文の位置づけを明らかにする。第 2 章は、調査対象と調査地の概略を描いている。伝統の表象を扱う第一部は全 4 章から構成される。第 3 章は、TIPA 構成員が用いる伝統概念を検討し、第 4 章は、TIPA 構成員たちによる公演の主体性とその限界を描く。第 5 章は、チベット最重要文化の公演における難民社会の問題を描き出し、第 6 章は TIPA が直面する難民社会の問題点を指摘し、第一部のまとめとする。第二部では、TIPA の現代的な側面に焦点を当てる。第 7 章は TIPA の下位集団、アカマによる現代的なチベット音楽 Ti-POP の歴史や位置づけを描き、第 8 章はレコーディング作業に現れたチベット難民としての葛藤を提示する。第 9 章では、アカマが難民社会においてどのような状況におかれているかが分析されている。以上が第二部である。第一部にも第二部にも属さないのが、ある演者の苦悩を主題とする第 10 章である。そして、終章においてまとめと今後の展望を提示する。

1959 年の亡命以降、チベット難民社会とその亡命政府は、自らのアイデンティティを守るために施策を講じ、同時に国際社会にチベット独立を働きかけてきた。本論文が対象とする TIPA はこうした戦略において主要な役割を果たしてきた政府組織である。本論文は、TIPA が伝統と現代的なものの表象に関わるなかで直面してきた出来事や、この組織内で葛藤する演者に焦点を当て、文化人類学における先行研究を検討する。

亡命下において、TIPA は伝統の保護と促進を目的として活動している。しかし、TIPA 構成員は伝統をそのまま保存するのではなく、改変を加えてもいる。同時に、伝統の喪失はかれらにとって大きな問題として現れている (第 3 章)。

TIPA は、難民社会の他の舞踊集団や本土の集団との関係で活動している。活動の中心となる公演では、公演地ごとに異なる戦略を導入するが、それは主導性を維持しつつも相手の意向に合わせるという重層性によって特徴づけられている (第 4 章)。

TIPA が守り提示する伝統は、難民社会においては「真のチベット文化」である。しかし、そういった伝統や文化は中立的なものではない。伝統の最重要項目、そして中国への対抗文化として提示されたチベット歌劇は、難民社会が抱え込むさまざまな問題を内包する (第 5 章)。

北インド・チベット難民社会がはらむラサ地域への偏りは、きわめて根深い問題であった。それは TIPA の演目にまで影響を及ぼしている。また、聴衆た

ちは TIPA 離れを起こしており、演者自身問題を抱えているにもかかわらず、TIPA 構成員は伝統表象をやめることが出来ない（第 6 章）。

難民社会で流通しているのは伝統的な音楽だけではない。現代的なチベット音楽 Ti-POP も流通し、若者たちから支持を得ている。それは、聴衆からも演者からも一体感をもたらすものとして期待されている（第 7 章）。

Ti-POP のバンド、アカマのレコーディングは、チベット難民の若者たちがいかに活動するかを見る絶好の機会である。演者としての個々人のぶつかり合い、異文化を背景とする葛藤、聴衆の意向の先取りなどを通して、チベット難民としての生きかたが現れる（第 8 章）。

アカマは聴衆にさまざまなかたちで消費される。それは聴衆にとって肯定的でもあり否定的なものでもある（第 9 章）。

演者たちは、誰もが積極的に演奏に取り組んでいるわけではない。自分のあり方に葛藤し、状況に揺さぶられる演者の生きかたは、旧来の図式では捉えられないものである（第 10 章）。

本論文は、TIPA が演じる文化表象に注目し、そこでの働きかけやかれらが直面する問題点を描き出す。同時に、その文化表象に関わりながらも葛藤する「ひととしてのディアスポラ」の生に注目し描き出す。そして、葛藤や揺れ動きといった形で現れたかれらの生の困難さを分有することで、我々の同時代性を回復し、そこに他者への想像力や他者との絆を見出そうとしている。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、チベット亡命政府が位置する北インド・ダラムサラでの20ヶ月の調査に基づく。申請者は、亡命政府によって結成されたチベット難民舞踊集団 Tibetan Institute of Performing Arts (以下 TIPA) を対象に人類学的研究を行った。本論文の独創的な点および評価すべき点は、以下の3点である。

まず、対象と方法についての独創性を評価したい。本論文は北インドのチベット難民社会というきわめて困難な地域社会を取り上げている。チベット難民社会についての調査は、申請者が初めてではない。しかし、20ヶ月の長期に渡って調査を行っている研究者は数少ない。申請者の関心が、チベット難民社会の文化と政治との関係にあるという点を考えれば、TIPA を主たる研究対象に選んだのは当然であり、また結果として成功であった。TIPA についての記述は詳細かつ客観的で、民族誌として価値の高いものである。

申請者はまた、TIPA の下位集団で、現代ポップ音楽（申請者の言葉を使えば Ti-POP）を演じるアカマの成員（ギタリスト）として公演やレコーディングに参加し、「内部」からの記述を試みている。文化人類学において「参与観察」は以前から唱えられてきた視点であるが、この場合の参与はせいぜい生活とともにする以上の意味はなかった。申請者はみずからパフォーマーとしてチベット社会に関わることで、あらたな分析対象を獲得し、わたしたちに提示することに成功している。

つぎに評価したいのは、申請者の人へのまなざしである。TIPA は、国際世界に向けてチベット文化を演じることでそのすばらしさを訴え、同時に中国共産党による弾圧という政治的状況を伝える「広告塔」である。何人かの研究者は TIPA についてこのような視点から分析を行ってきた。しかし、TIPA 内部の状況はどうか。そこに属し、チベットの伝統を演じる演者たちはどうか。かれらはどんな問題と直面して、日々伝統を演じているのだろうか。このような問いから TIPA の成員を見る申請者の目は鋭く、また優しい。

同じまなざしが、アカマの演者たちにも認められる。かれらは、伝統音楽を主たるレパートリにしていないという意味で、国際社会に訴える力は弱いかもしれないし、その意味で政治的にも有用な組織とは言えない。しかし、最近かれらの音楽は、チベット難民社会の創造性を示す重要な文化実践として認められつつあり、またなによりもチベット難民社会の若者たちの間に受け入れられつつある。こうした状況で、アカマはときに批判の対象となり、ときに賞賛の対象となる。その意味で、アカマを取り巻く状況はよりダイナミックで、成員たちの考え方も多様かつ両義的である。申請者は TIPA やアカマの直面する問題や成員の悩みを丹念に述べることで、ディアスポラとしてのチベット難民たちの生き方の把握を目指している。さらに、申請者は、親しくなったチベット人の一人のライフ・ストーリーを記述することで、伝統を保持し、独立を求めるディアスポラといった一枚岩的なチベット難民理解の問題点を明らかにする。

以上のように、本論文の特徴は、ともすれば政治的言説を繰り返すだけに終わってしまう傾向にある難民・ディアスポラ研究の問題を克服し、個々人の顔の見える分析を試みている点である。こうした個々人の顔にこだわる理由の一つは、申請者がきわめて濃密な関係をインフォーマントたちと確立してきたという事実と関係があろう。

最後に理論的貢献について指摘しておく必要がある。申請者は本論文で、中国共産党による弾圧の犠牲者とか、したたかな抵抗者という、ディアスポラ研究や抵抗研究において提示されてきた人観念を批判している。代わって、申請者が提示しているのは、困難な状況において苦悩する自己である。それは受動的な存在を意味しない。むしろ能動的ではあるが、それに還元するだけでは理解できない存在である。このような他者の記述はまた、わたしたちとかれらとの同時代性を明らかにし、絆を確立する可能性を示唆している。

以上のように本論文は理論的にも独創性に満ちた一級の民族誌であるという点で審査員の意見が一致した。共生文明学専攻、文化・地域環境論講座は、文明相互の共生を可能にする方策を探究するために創設されたが、その設置目的にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成21年1月27日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。